

一〇二三年九月二三日

此処もまた墓仕舞らし秋彼岸
新蕎麦を啜る馴染みの古暖簾
吹き抜けに秋日傾くコンサート

康子 たか子 なつき

二〇一三年九月一八日

澄 うつぎ

二〇一三年九月二一日

帰省子の歯ブラシ一本忘れ物
石庭にいづくともなく初紅葉

康
な
つ
き

塚なせる無

背を撫づる猫の機嫌や十三夜
新走り潜るのれんの芳しき
敬老日笑顔をくれし歯抜けの子
一陣の風に萩叢右往左往
荒園の一隅照らす螢草
二〇二三年九月二〇日

素 智恵子 稲香

緑青の宮屋根秋の日に反りぬ
毬栗の徑に転がる森の朝
終電の灯の遠ざかる虫の闇
一〇一三年九月一九日

澄ほん子こ

長き夜を祖母に手ほどきするスマホ
久闊の握手を交はし野路の秋
夜食いま版下を待つ編集部
尺蠖の帽子の縁を一巡り
黄昏の日に影伸びる藁ぼっち
紅芙蓉きりりと絞り今日を閉づ
ビルの窓合はせ鏡に秋の雲

ぼんこ 満天 素秀 うつぎ むべ たかべ 愛か子 正

毎日句会みのる選・二〇一三年九月一四日